

出会い

私が大学を卒業したのは一九七〇年である。その同じ年に、今は倒産して存在しない東京のさる大手の画廊が、販売のための展覧会という形で、恐らく戦後初めてのことと想うが、まとまった数の現代ソヴィエト絵画(ソ連は崩壊して、既がない。旧ソヴィエト絵画の中心がモスクワとサンクト・ペテルブルグにあったことを考慮して、これ以降は混乱を避ける意味で、ロシア絵画と総称することにする)を日本に紹介している。展覧会は札幌の某デパートで行われ、好評を博したという。一九八九年の春、仕事の関係でモスクワに赴任する直前に、偶然古本屋で七三年と七四年に東京のデパートで開催された現代ロシア絵画の展覧会のアルバムを手に入れたが、その巻頭の辞から七一年にもどこか地方都市のデパートで同じような展覧会が行われ、七二年からは東京で毎年一回の割で展覧会が開催されていたことが判る。アルバムは今も大事に持っていて、時々見ているが、そのアルバムから判断する限り、七三年は特に優れた絵が集められていたように思う。

七〇年代はその画廊の活躍のお陰で、ロシア絵画は日本である程度のブームにさえなっていたようである。七〇年代にロシア絵画に関する文献が幾つか翻訳され、紹介されたこともそのブームを反映しているのであろう。以前その画廊に勤めていた人に数年前に聞いた話では、現代ロシア絵画は全部で約二万点日本で販売されたという。その数から言って総てが良い絵とは考えにくいだが、優れた絵が含まれていたのも確かであろう。それなりに良い仕事をしていたと思うが、その画廊がロシア絵画とは無関係なスキャンダルを伴って倒産してしまったことは、ロシア絵画にとって大きな不幸であった。その後、彼らの事業を引き継ぐような本格的な画廊は現われず、ロシア絵画は日本でその本当の良さを理解される前に、定着の芽を摘み取られてしまった。

私自身はと言えば、八九年モスクワに駐在するまでは絵に特別な関心があったわけではなく、七〇年代の上述の日本のロシア絵画の動向については、当時ほとんど門外漢に等しかった。

そんな中で、モスクワのトレチャコフ美術館所蔵の近代ロシア絵画の展覧会が東京のデパートで開催されたことは灰(ほの)かに記憶している(後で知ったところによると、それは七六年のことであった)。実際見には行かなかったのであるが、白い羽根飾りの黒い帽子に黒い外套をまとい、無蓋(むがい)の馬車に座った貴婦人の絵を展覧会の宣伝のポスターか何かで見たことがある。黒い瞳に愁いを湛えた貴婦人の異国情緒豊かな美貌に、淡い憧憬を抱いたことを覚えている。ずっと後になって、その絵が十九世紀後半の移動展派の画家 I・N・クラムスコイ(一八三七~八七)の傑作、「見知らぬ女」(一八八三)であることを知った。日本では「忘れえぬ女」と訳されているその絵は写真を拡大したものであり、実際の絵ではなかったのが、厳密な意味では、私が最初に見た本物のロシア絵画とは言えないかもしれない。

最初に見た本物の絵としては、それより前の七〇年のことになるが、同じく十九世紀後半に活躍した風景画家 I・I・シーシキン(一八三二~九八)の「ライ麦」(一八七八)を挙げる事が出来る。絵には黄金の穂がたわわに実ったライ麦畑が広がる中、その中程から奥に

かけて枝振りの良い十本あまりの松の大木が秋晴れの空を背にして疎(まば)らに聳(そび)えるように立ち、また、ライ麦畑の前景にはライ麦を左右に押し分けるようにして畑の中を通じる農道がその姿を露わに見せていて、荷車が丈の低い雑草を踏み締めて轍(わだち)を残したその地面では、折しも低空飛行で通り抜けんと二羽の燕が落とした影がその素早い飛翔を追っているといった長閑(のどか)な田園風景が描かれている。

ロシアで有名なその絵をモスクワのトレチャコフ美術館か、あるいはサンクト・ペテルブルグのロシア美術館で見たのは、大学を出て半年ほど、旧ソ連専門の小さな旅行社に勤めた経験があり、その会社からグループツアーの副添乗員としてモスクワ等を訪れた時のことである。階段を上って展示室に入るとすぐ真正面にその絵はかかっていた。絵を見た場所がどちらの美術館であったかの記憶は最早定かではないが(近年になってトレチャコフ美術館を訪れ、旧館でその当時の展示室を探したが、それらしく思われる場所は見当たらなかった)、展示室に入った途端、思いがけずライ麦畑が視界に飛び込んできて、絵から強烈な衝撃を受けたことは、今でもはっきりと覚えている。

ライ麦の穂の一本一本が克明な鮮明さをもって迫ってき、その圧倒的な量の輝く黄金の穂に目が眩む思いだった。後頭部から背筋にゾクゾクとした感動が走り、そのまま何秒かは、体が麻痺したように動けなくなってしまった。良い絵を見ると髪の毛が逆立ち、震えが背筋を走ることその後も何度か体験しているが、体が言うことをきかないというような経験は後にも先にもその時きりである。

低空飛行の瞬間を捉えた燕の飛翔や農道の清澄な佇まいは私自身の幼年時代の心象風景を彷彿とさせ、その意味でもその絵は懐かしい。ずっと後年になってアルバムで絵のサイズを調べて意外な感じを持った。ロシア絵画としてはそれほど大振りとは言えない百号ほどの横長の画布に描かれた作品であるが、私の印象ではその三倍は大きく見えた。恐らく絵を鑑賞したというよりは、額縁を乗り越えて、その絵に描かれた実際の風景の中に入り込んでしまったような印象体験からそう思えたのであろう。その強烈な印象のためか、その時美術館で見たはずのほかの絵は不思議と言ってよいほど記憶に残っていない。

その後、「ライ麦」は所蔵しているトレチャコフ美術館の改築の絡みで、私のモスクワ駐在期間中も含めて、長らく再会する機会に巡り会わなかったが、プライベートでモスクワ等を訪れた九七年七月、漸くトレチャコフ美術館で再会を果たすことが出来た。大変に優れた絵であることが再確認でき、それなりに深い感慨を覚えたが、前に体験したような衝撃的な感動は、残念ながら、甦らなかった。

現代ロシア絵画について言えば、最初に出会った作品は、なかなか印象深い絵であった。この章の冒頭に述べた例の画廊の別会社が旧ソ連との貿易を手がけていて、輸出の船積の仕事をもらうために時々訪れていたが、その担当者とは比較的懇意になって、八七年頃だったか、営業訪問したある日のこと、事務所に隣接している画廊の特別室に突然招かれて、現代ロシア絵画の粋(すい)を何点か見せてもらったことがある。絵画販売の担当者が何か質問でも待ち受けるようにそばに付き添ったために、落ち着いて鑑賞出来なかったのが今にして思えば残念であった。その中の一点は特に気に入って参考に値段まで尋ねたので、よく記憶に残っている。二十号ほどの少し横長の油絵であったが、背景の川の対岸の低い丘の上には夕日が沈みかけ、丘の深緑の森と中景から前景のさざなみ立った川面は夕映え

に照らされて、静けさの中に美しく、どっしりと落ち着いた表情を見せていた。その絵の静かな夕暮の、深みのある色合いが忘れられない。後年になって、前述の現代ロシア絵画の展覧会のアルバムを見て、そこに載っていたロシア(共和国)人民芸術家N・I・オーセネフ(一九〇九~八三)の作品、「静かな夕べ」がその絵に酷似していることに気がついた。間違いなく同じ絵であったと思われ、もう一度じっくり鑑賞してみたい気がしきりにするのであるが、今となっては、それも叶わぬ夢であろう。